

日本生理人類学会若手の会 第3回若手研究者交流会のお知らせ

日本生理人類学会若手の会は昨年度より新しい企画として若手研究者による交流会を立ち上げました。研究発表や討議を通してお互いの研究のバックグラウンドを議論し、研究の視野を広げることを目的としています。

第3回目として滋賀医科大学の田畑先生のご協力を頂き、研究室の方との交流会を行います。多数のご参加を願ひ申し上げます。また、周りにご興味をお持ちの方がいらっしゃいましたら、是非お誘いあわせの上ご参加くださいますようお願い致します。なお、懇親会の会場の予約の都合がございますので、参加される方は世話役の石橋(ishibasi@design.kyushu-u.ac.jp)までお知らせください。もちろん当日の飛び込み参加も歓迎です。

第3回若手研究者交流会

日時 平成17年8月27日(土) 14:00 ~
場所 滋賀医科大学医学部看護学科
看護棟看護第1講義室

講演:

1日の副交感神経機能を測定する意義
秦 朝子さん
(滋賀医科大学大学院医学系研究科)

睡眠と副交感神経活動値との関係
林 崇子さん
(岐阜大学教育学研究科)

看護学と生理人類学の共通点
-看護技術の安楽性の視点から-
林 静子さん
(滋賀医科大学医学部看護学科)

光とメラトニン抑制
-生理的多型性と環境適応能-
樋口重和さん
(秋田大学医学部健康増進医学分野)

生理人類学とゲルド的視角
-循環調節のばらつきからのアプローチ-
石橋圭太さん
(九州大学大学院芸術工学研究院)

脈拍数測定における誤差
小林宏光さん
(石川県立看護大学)

参加費: 無料

終了後から懇親会(実費)を開催します。
懇親会は草津駅前「竹生」で行います。
御泊りの方は草津駅周辺で宿をお取りになると便利です。



若手の会に関する問い合わせ

会長: 石橋圭太(九州大学大学院芸術工学研究院),
E-mail: ishibasi@design.kyushu-u.ac.jp
副会長: 恒次祐子(独立行政法人森林総合研究所),
E-mail: yukot@ffpri.affrc.go.jp

1日の副交感神経機能を測定する意義

滋賀医科大学大学院医学系研究科 秦 朝子

心拍変動とは洞調律での1拍毎の心電図RR間隔のゆらぎのことで、これにより自律神経機能が評価できるといわれています。私の研究室では、心拍変動から副交感神経機能を粗視化法を用いて求め、その副交感神経機能を1日24時間累積した値とさまざまな生体機能との関連についての研究を行っています。今回はその「1日累積副交感神経系活動量」という指標や粗視化法の意味、これまでの研究で明らかになっている年齢や病態との関係、現在取り組んでいる研究内容などについてご紹介させていただきます。

睡眠と副交感神経活動値との関係

岐阜大学大学院教育学研究科 林 崇子

最近増加してきている疾患のひとつに胃食道逆流症がある。胃食道逆流症患者の自律神経の機能に着目し、心拍変動を粗視法で解析し副交感神経成分を抽出し、さらに24時間の副交感神経成分を累積し1日の副交感神経活動量を求め健常者と比較検討した。その結果、胃食道逆流症患者は睡眠中の累積副交感神経活動曲線が健常者とは異なるパターンを示した。この他に睡眠時無呼吸症候群と累積副交感神経系活動量との関係、交感神経遮断剤が副交感神経に及ぼす影響についても紹介したい。

看護学と生理人類学との共通点

～看護技術の安楽性の視点から～

滋賀医科大学医学部看護学科 林 静子

看護の現場において、根拠のある看護技術、科学的裏付けのある看護技術の提供が強く求められている。そのため、看護技術がもたらす生理的効果を明らかにした研究が増加し、看護系の学会だけではなく日本生理人類学会の中でも報告されている。

なぜ、根拠のある看護技術、科学的な裏付けのある看護技術の提供を必要としているのか、看護の定義や対象者の見方、看護の役割、技術の評価視点となる「安全・安楽・自律/自立」等から説明させていただきます。そして、看護学と生理人類学との共通点、そして生理人類学に求めるものについて述べさせていただきます。

光とメラトニン抑制

～生理的多型性と環境適応能～

秋田大学医学部 樋口重和

メラトニンは主観的夜に脳の松果体から分泌され、体内時計の中核である視交叉上核によって分泌が調節されています。また、メラトニンは光曝露によってのみ特異的に分泌が抑制されるという特徴を持っています。我々は過去数年この光曝露によるメラトニン抑制に着目していくつかの実験を行ってきました。その結果、光によるメラトニン抑制には個体差が大きいこと、民族差や季節差があることが分かってきました。ここでは、これらの結果とあわせて、これらの違いが何に起因するのか？何のために違いが生じるのか？また、これらの違いが睡眠や概日リズムなどヒトの行動や生理にどのように影響しているのか？など、生理人類学のキーワードである生理的多型性や環境適応能の視点をふまえて考察を行う予定です。

生理人類学とグールド的視角

～循環調節のばらつきからのアプローチ～

九州大学大学院芸術工学研究院 石橋圭太

生理人類学はばらつきを誤差とせず実体とみなす学問です。ばらつきに対する深い洞察が必要です。断続平衡説で知られる古生物学者スティーブン・グールドは、その外挿主義を廃した生物進化に対するアプローチのみならず、ばらつきに対して平均値のみでは語れない生物変異の全容についても、多くの視点をもたらしてくれます。生理的な反応の多様性ではなく多型性を議論する上で必要な視点について、循環調節のばらつきから考察したいと考えております。

脈拍数測定における誤差

石川県立看護大学 小林宏光

脈拍数は最も簡便な生体指標であり、臨床検査の最も基本的な技術であるといえる。基礎看護技術の教科書などでは、脈拍数測定は1分間もしくは30秒間の測定が推奨されているが、現実の臨床の現場においては20秒間や15秒間の測定が行われることが多い。計測時間が短ければ誤差が大きくなるが、計測時間と誤差の定量的関係は明らかにされていない。また心拍変動が周期性を持つことを考慮すれば、単純に計測時間が長ければ正確であるとは言い切れない可能性もある。そこで、脈拍測定時の計測時間と誤差の関係を実際に計測された心拍データを基にしたコンピュータシミュレーションによって検討したので報告する。